

こんなときでも と こんなときだからこそ：「正解のない問い」に向き合い続ける コロナ禍の保育園から

野中， 泉
社会福祉法人アトム共同福祉会アトム共同保育園：園長

<https://doi.org/10.15017/6796311>

出版情報：生活体験学習研究. 21, pp.33-38, 2021-07-30. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning
バージョン：
権利関係：



こんなときでも と こんなときだからこそ

—「正解のない問い」に向き合い続ける コロナ禍の保育園から—

野 中 泉*

この原稿を書いている今、2021年の5月はいわゆる第4波の最中、アトム共同保育園がある大阪の熊取町は3度目の緊急事態宣言下にあります。長引く感染症対策と緊張感のある保育所運営、現場が疲弊していないと言ったら嘘になりますが、それでも、第1波の頃、突如現れた未知のウィルスのパンデミックで社会が一変してしまった1年前の春とは、私も仲間たちも違う心持ちの中で毎日を過ごしています。その変化はどういうものであるのか、また私たちが陥った混乱とはどのようなものだったのかをコロナ禍にあった2020年度の中でも、特に混乱期にあった年度の前半をふりかえりながら考えてみたいと思います。

1・共同保育園としての歴史

アトム共同保育園が設立されたのは1967年（昭和42年）4月。当時、熊取町には0～2歳児のための保育所はありませんでした。そこで必要に迫られた保護者、特に京都大学原子炉実験所（現京都大学複合原子力科学研究所）の若い保護者がその前年から「保育所問題を考える懇談会」を有志で発足。翌年にあたる1967年に保護者の自宅（原子炉官舎）の一部を開放し、専業主婦だったひとりの保護者を保母と

して雇用する形でその保育は開始されました。その後1970年に、原子炉敷地内のプレハブで0～3歳児対象の職場保育所としての「アトム共同保育所」開設、一旦は利用者の減少から閉鎖も検討されますが、1972年には未だ産休明け保育がなかった熊取町と交渉し町が産休明け保育を開始するまでのつなぎと役として補助金を受けとれるようになり、その門戸を職場内から地域へと広げます。

ただし、当初は、親がつくった保育所、親が雇った保母という感覚が強く、共同保育所という名前こそついていましたが、実質は「共同の子守り」であったと当時を知る人たちは言います。その転機となったのは、1978年に京都の「風の子保育園」での保育経験を持つ市原悟子（現当法人理事長）の採用です。その後、市原を中心に保育の基礎を築いた親と保育士の奮闘、長く30余年に及んだ無認可保育所時代の実践は、多くの書籍やレポート、2003年のNHKスペシャル等で世に知られているところですので、ここでは細かく触れません。しかしながら、そこで繰り広げられてきた親と保育士が知恵と力を出し合う「共同の子育て」の実践が、創始から50年以上の月日が流れ、姉妹園のつばさ共同保育園と併せると園児数は250名、職員数も90名を超える現在に至って



1976年～2002年
プレハブでの認可外アトム共同保育所



2003年
旧町立第6保育所の場所で認可園
アトム共同保育園として開園



2014年
アトム共同保育園 園舎建て替え
現在に至る

* 社会福祉法人アトム共同福祉会 アトム共同保育園 園長

連絡先：〒590-0456 大阪府泉南郡熊取町長池2-1 E-mail: nonaka@atomfukushikai.net

TEL：072-452-7112

も、私たちが立ち返る大事な柱であり、またその思想がこの未曾有の困難（コロナ禍）においても、私たちの行動の糸口になり得たことを押さえ、本題にはいりたいと思います。

2・突如一変した社会と保育現場の葛藤

2020年3月末。全ての学校と公共施設が自治体の指示で一斉に閉鎖になった一方で、保育園と学童保育所は、感染リスクに配慮しつつ開所しろというお達しが強制的に下されました。全容がつかめない中、アトムもとりあえずは自治体からおりてくる指示に従って、休業中もしくは在宅勤務の保護者には登園の自粛と家庭保育の協力を要請し、職員は、パート職員の全員、基礎疾患のある人、妊娠中の人、乳幼児や小学生を子育て中の職員にも休んでもらうことにしました。アトムでは登園自粛となった最初の2週間は親たちがずいぶん頑張ってくれて、医療や介護従事者や運送業等一部の仕事以外の人は家庭保育協力、登園家庭は全体の40%まで落とせました。実はこれは、熊取町全体でもダントツの家庭保育協力の数、私たちの予想もはるかに超えるありがたい協力でした。しかし、職員も全体の3分の1程度の出勤、利用者は減っているとはいえ日・祝日の休日保育も、午後10時までの夜間保育も継続していたアトムでは、出勤職員の負担はかなり大きなものでした。しかもコロナに関する情報は圧倒的に少なく、微熱などの軽い症状であっても体調変化のある職員は大事をとって2週間休ませるという対応を取っていたので、どんどん体制は苦しくなりました。毎日、その日働ける職員と出席する子どもの数を見ながら、主任が手書きでシフトを書き直し続ける日々、いったいいつまでこれが続くのか、「非常事態」「不要不急の外出は控えて」とテレビでは連日緊迫感のある言葉が叫ばれている中、そもそも保育園を開けていいのか、不安ばかりが募る日々でした。

「アトムは閉めないでくれるよね」という保護者の日々の不安や期待に応えたいと思いつつも、未知のウィルスへの恐怖と、またこれまで低賃金でその専門性を正当に認めてこなかった保育士に、こんなときばかり感染リスクの高い最前線を押しかける国の矛盾だらけのやり方にもモヤモヤが収まらず、園長である私自身が、不安や葛藤に押しつぶされそう

な毎日だったことを思い出します。

私の引き出しには、宣言下の2020年4月に職員に書いてもらったレポートを今も大事にしまっているのですが、そこには、突如様変わりした社会への不安、感染リスクと隣りあわせて保育園を開け続けることとそこで働くことへの葛藤、逆に自宅待機になって仲間と共に働けないことへの戸惑いなど、リアルタイムの保育士の胸の内が飾らない言葉で書き連ねられています。

職員のレポート（2020年4月）より抜粋

「アトムは、パートさんや妊娠している職員は休みになりました。私も休みたい。子どもは（親が）家でみてほしい。頭ではわかってるのです。私は正職だし、家庭を持っているわけじゃないし、健康。「えっ、そなん、私は出勤するしかないやん」ってなった。頭では私だけが辛いんじゃないとわかっている。でも大人の人数がギリギリの中ではやっぱりしんどくて、休んでいる人はいいよなと思ってしまう弱い自分がいるのです」

「妊娠中子育て中で休みをもらっています。みんながお互い様だし、気にしないでいいんだよと声をかけてくれて涙が出ます。

でも、仲間の本心を想像すると、わりきれない自分もあります。ありがたいのに、ごめんなさいとしか思えません。せっかくもらった時間も子どもが家にいるので有効に使うことも難しく、いろんな思いが自分の中を巡ります」

「段取りして休んでくれる保護者が多くて感謝する一方で、休めるんじゃないかな？テレワークで家にいるんじゃないの？と思うのに子どもを預ける保護者には「どうして？」と思ってしまう自分がいる。そこまでして仕事しないといけないの？この状況でも子どもを家で見られないの？保育士として目の前の仕事をやるだけという思いと、感染者が出たときを想像する恐怖でぐちゃぐちゃになり、何が正しいのかわからなくなる」

3・こんなときでも、こんなときだからこそ起こる「事件」

人間の暮らしにとっての「不要不急」と「やむを得ない」はどんなことかを仲間と一緒に考えたいけ

れど、この時期は集い話しあう会議も控えていたため、共有できない不消化なモヤモヤが園全体を覆っているようでした。働く保育士と働けない保育士、登園する保護者と自粛している保護者、休んでほしい保育士と預けたい保護者、それぞれの関係に目に見えない亀裂が生じ始めギクシャクし始めていた4月の半ばに、こんな事件がおこりました。

2歳児と0歳児の兄妹は、自粛期間中も毎日朝早くから夕方遅くまで保育が入っていました。育休から復帰したばかりの若い母親は「うちの職場はどうしても、出勤しないといけなくて、休み協力できなくてごめんなさい」と笑顔で頭を下げてくれるけれど、微熱があったり、便が緩いなど心配な症状があっても病院に受診してくれず、園も休ませてくれない。担任も看護師も厳しい母親の職場環境に同情しながらも、今一つ緊迫感のない母の様子に戸惑ってもしました。そんな中、事件は起きました。その日、朝から下痢が続いていた0歳児の早めのお迎えをお願いしようと、母親の職場に電話した担任が聞いたのは「〇〇は、育休から復帰が延期になっておりますので出社しておりません」という信じられない言葉だったのです。「世の中がこんな大変なときに、嘘つくなんて、信じられへん」休憩室で憤慨する担任。担任がずっと親身にやりとりを続けてきたことを誰もが知っていたため彼女の残念で憤慨する気持ちは、みんなが痛いほどわかるころでした。重苦しい空気に休憩室が包まれたとき、長年アトムに勤務する事務職員が「でも、うそつかなあかんくらい、子育てがしんどかったってことかもしれんね…」とポツリと言いました。それを聞いた他の誰かが「アトムには、今までだって、弱音を吐けずに、ごまかす人なんて、いっぱいいたよな」と続けました。瞬間みんな黙ってしまったのは、その次に「いつもはわかってあげられるけど、今は、違う」「ルールはルール。他のみんなは、がんばってるやん」という言葉を飲み込んだからかもしれません。もちろん、目の前で困っている人に手を差し伸べないような職員はアトムにはいません。でも、この間コロナという大義名分とセットで語られた「やむを得ない事情」や「不要不急」という言葉に覆われて、目の前の出来事への視線が揺らぎそうになったことは否定できませんでした。結局、その日私たちには答えがみつかり

ませんでした。でも、次の日、その場にいたひとりの保育士がこんな手紙をくれました。

職員の手紙（2020年4月抜粋）

「昨日の出来事をどう考えればよいのか。命に関わるコロナと共にある今は、これまでと同じとは言えないのではと迷い結局結論が出ない。ただ、私もかつてアトムの保護者だった。保護者時代、子育てがしんどくて仕事が休みの日に仕事だと嘘をついてアトムに子どもを預けたこともある。その職員はきっと私の嘘に気づいていたであろうが、何も言わずに子どもを迎え入れてくれた。そんな職員やアトムに何度も助けられた自分だったので、今度は保育士として、そんな保護者のしんどさを理解し、支える保育士でありたいと日々思っている」。

4・アトムの「あたり前」を取り戻すところからやり直し

私たちが向き合っているアトムの仕事は、こんな時でも、いやこんな時だからこそ、世の中の一律のルールや、社会全体の正しさの側から考えるだけでは答えが見つからず、どうしてもなく『はみだしてしまう』出来事の連続なのだと、私たちは気づかざるを得ませんでした。

停止していた園内での職員会議をグループごとに再開した私たちは、この出来事を共有すると共に、改めて職員それぞれの率直な胸のうちも出し合いました。その上でもう一度今私たちができることは何かを考えることから始めました。

まず、それまではコロナに関する行政の通達文書は、機械的にそのまま配布していたのですが、それに必ず園からのお便りをつけることにしました。職員有志がYouTubeの限定配信で休んでいる家庭への応援動画を上げ始めたのもこの頃です。以下は、登園自粛の延長を伝える自治体からの通知文と一緒に私たちが出したお便りの抜粋です。



職員 グループ会議の様子1



フレイフレー みんな！アトム私設チアガール

保護者へのおたより（2020年4月）

「お休みや保育時間短縮などの協力、ほんとうにありがとうございます。先行きが見えない中、保育園からも、休んでくださいとお願いをしなければいけないこと、ほんとうに私たちもつらいです。でも、この感染拡大を一刻も早く、くいとめるためには、子どもも大人も数を減らしていく以外にはありません。どうか、わかってくださいね。

そして、その一方で、アトムは「すごく辛い」時のために開き続けたいと、決意を新たにしています。

だから、「ひとりぼっちだあ」とか「子どもとずっと家にいるの、辛い」と耐えられなくなったとき、アトムに電話ください。おしゃべりしよう。「つまらないよう！」「がんばろう！」のメールも、お手紙もぜひひちょうだい。

そして、そして、本当に仕事も休めない、誰にも頼めない、大ピンチのときには、やっぱりアトムに預けてください。そんなときのためアトムは、がんばって開いていたいと思います。」

長期に休んでくれている家庭には1軒ずつ担任が電話をすることにしました。「元気にしてる？」「変わりない？」保育の合間や保育後にかけ続けた電話の向こう側から見てきたのは、私たち保育士と同じように、葛藤と苦悩、孤独と不安の中で子育てを余儀なくされている親たちの切羽詰まった状況です。夫婦共にテレワークなので家庭保育しているが、小さな子どもが走り回りとても仕事にならないのにノルマは減らず苦しい。自営業の仕事が全くなくなって経済的に不安になっている、仕事は休みだが、3

兄弟と母だけで2週間以上家にいて限界、壁に穴があいた子どもに手を挙げそうなどなど。

私たちは改めてひとつひとつの情報を持ちより会議を重ねました。それ以前の話し合いと大きく違うのは、「仕事が休みの保護者」「テレワークの保護者」への対応という一般論としてのコロナ対応ではなく、「〇〇くんの家は、だいふお母さん疲れてた。明日一度登園したらいいよと伝えた」「△△ちゃんのところ、父の仕事がなくて夫婦の関係が悪くなってる。休みを継続してくれるけど、明日はちょっと覗いて来ようと思う」など、保育士たちが自分の知っている子どもや親のことを話す日常を取り戻しつつあることでした。顔の見える近い関係でひとりひとりのことを個別に考えていく、もがきながらも少し方向性が見えてきたと感じました。

同時に、朝夕の登降園の時間には、登園させている親たちにも声をかけ直しました。こちらも丁寧な声かけで見てきたのは「パート先を休んだら首にすると言われた」「店を閉じたいけど、今閉じたらコロナが出たと思われる。世間の目が怖い」「こんな状況で、子どもを保育園に預けて働かないといけなことが苦しいのに、上司にみんな頑張っている時にわがまま言うなと恫喝された」などのリアルで苦しい胸のうちと現状でした。それこそ、当然のことですが、普段から虐待のリスクがあった家庭や非正規雇用等で通常であっても仕事が安定していなかった家庭は、ほんの1～2か月の自粛期間にも大きなダメージを受けている現実が浮き彫りになりました。その現実がコロナで新たな問題が生まれているのではなく、コロナによりこれまで社会に内在していた課題（雇用、格差、虐待、地域社会の在り方）が浮上しているに過ぎないということは、専門家ではない私たちにもすぐにわかりました。それよりも、ひとりの問題に深くむきあうことで、その向こう側の社会の大きな課題が見えてくるのはこれまでもアトムの常だったのに、たった数か月でそれを考えあうことさえ忘れていた自分たちに一番愕然としました。その頃、私は園の機関紙「アトムっ子」にこんな文章を書いています。

（アトムっ子 2020年4月号巻頭 抜粋）

「園を開くことに不安や葛藤がないと言ったら嘘に

なるような毎日の中、去年の今頃カリキュラムの見直しをしていた際のおっちゃん（市原理事長）の言葉をふいに思い出しました。「やりきれないような事件が起きる度に、社会の何が犯人をここまで追い詰めてしまったのか、二度とこんな孤独で辛い人を出さないために、私たちができることは何かと、親と保育士が必死で考えあってきた。それがアトムのカリキュラムの根本」。今私たちが直面している不安は、命に関する未知のウィルスへの感染リスクだけではありません。多くの人の日常が突然失われたことへの不安、そして自分や家族が「感染者」として社会からはじき出されてしまうのではないかという不安です。病に感染した人に「大変でしたね」と声をかけるのではなく「迷惑かけるな」と平気で罵倒する社会への不安です。「助けて」といえる関係づくり、「お互い様」の地域づくり。アトムの保育士が親たちと一緒に何十年もの間、一生懸命考え続けてきた「誰も孤独にしない」努力は、こんな時のためではなかったか。自分たちに問いかける日々です。」

5・安心して働き続けられる職場への模索

そうは言っても出勤している保育士の過酷な状況は変わりませんでした。むしろ、いろいろな意味で力尽きて家庭保育が難しくなり登園し始めた家庭もジワジワと増えており、今後体制的に苦しくなるのは目に見えていました。悩んだ末に、一律に休んでもらっていたパート職員にも働ける人は働いてくださいと声をかけることにしたのですが、思いがけず多くのパートさんから「声をかけてくれるのを待っていた」「私たちもアトムの力になりたかった」とうれしい返答をもらうことになりました。基礎疾患や妊娠中の職員は別として、子育て中の正規職員からも家族の助けを借りながら出られる日は出勤したいという申し出がきて、迷いながらもそれをお願いすることにしました。まだ、新型のウィルスの情報は少なく、不安はありましたが、それでも、ひとりまたひとりと仲間が戻ってきてくれたことは、限界を迎えていた保育士たちをとてつもなく励ましました。

法人、理事会の迅速な対応も、私たち保育士の背中を押しました。まだ、国も自治体もコロナ救済の助成金などが決まっていないこの段階で、働きたくても働けない職員の休みは全て特別休暇として正規



職員 グループ会議の様子2

職員もパート職員も100%の給与保障をすること、また、この期間出勤した職員には勤務日数に応じた危険手当を支給することを決めてくれたのです。これは、現場の士気を高める大きな出来事でした。お金がもらえるという単純な喜びだけでなく、法人が現場職員の苦しさを理解し大事に考えてくれていることを実感できる決定だったからです。

同時に、法人内に管理職と職員でコロナ対策の委員会を立ち上げ、コロナに関するできるだけ正確で最新の情報を収集することに努め、その上で保育所運営、園生活での法人のガイドライン（マニュアル）を作成しました。自治体の警戒区分に応じた、行事開催の考え方から、園内の消毒、給食の提供時の手袋マスクの着用や、手拭きタオル、コップの使用、保護者の保育室への立ち入りなど、考えつく場面ごとにガイドラインを定め5月にはそれを職員に周知しました。（※ガイドライン作成時の主な参考資料：厚生労働省発出の「保育所における感染症ガイドライン」「新型コロナウイルス感染症対策に関する保育所等に関するQ&A」、全国保育園保健師看護師連絡会 学術委員会発出の「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック」）

また、日々の職員の検温などの健康チェックも徹底しました。ただしこの時期は発熱しても、PCR検査はもちろんのこと風邪かどうかを病院で診断（受け入れ）してもらうことさえも難しく、発熱後の経過観察は依然として2週間取らざるを得ませんでした。（現在は解熱後24時間）これは自分が感染源になるかもしれない恐怖と共に、働く私たちにとって本当にストレスが大きいことでした。

それでも、その他、園内はもちろん園外の職員家

族の職場や学校で濃厚接触者や陽性者が出た場合の対応のフローチャート作成など、私たちにできる準備と学習を手探りで重ねていきました。

6・コロナとの戦いは「正解のない問い」に向き合い続けること

ここまでふりかえったのは、いわゆる第1波の時期の私たちのことです。その後も、コロナ禍での保育所運営は続いています。

5月に作成したガイドラインはその後、2度目の緊急事態宣言の際に改訂しました。ウィルスに対する対応や社会の状況に変化があったからです。しかし、感染症対策でわかってきたことが増え、見えてきた方向性はあるながらも、職場内には自身の感染へ不安を訴える声や保育園を開くリスクを心配し続ける意見も常に一定数あり、今もリスクの側からだけ考えれば、彼女たちの混乱や不安を完全に払拭する「正解」は私たちにもまだわからないままです。でも、その迷いや揺れにもふたをせず、ひとつずつ話し合いながらアトムの子どもたちと大人たちの「日常」を取り戻す努力をする「覚悟」だけが今の私たちが行きついている心境です。

突然の緊急事態宣言で始まった2020年の春。私たちは、保育園を開けることも閉めることも自分たちで決めることはできませんでした。わからないことだらけのウィルスの猛威に社会全体がお手上げ状態だったので仕方ないことかもしれませんが、ほとんどの社会的な活動や教育さえもが画一的に自粛や休止になったことと、外側から押し付けられた社会的責任で保育園が開所を勝手に決められたことは、考える余地も話し合う余地も与えられない選択であった点においては、同じだったのではないかとふりかえります。

少なくとも私たちは、その「はじまり」をやり直すことからしか、アトムらしい保育や家庭支援を継続することが困難でした。改めて子どもが育つ場には人と人の「密」が不可欠だという大前提に引き戻し、私たち自らが、考え、話しあい、決断していくことの連続がこのコロナ禍にあっても「アトムの毎日」にあり続けたことが、唯一アトムがこの期間もコロナと戦いつづけられた証だと思っています。こうして考えてみると、コロナ禍で保育園を開き続けることは、感染の恐怖との戦いだけでなく、この難局で次々に沸きあがる「正解がない問い」に向き合い続ける覚悟を決める時間だったと言えるのかもしれない。

去年は、アトムの周りで、いくつかの子育て支援の場や、有志の集まりが、ひっそりと、地域での活動を閉じました。自治会やボランティアの活動でも、これを機に無くなったことがたくさんあります。「コロナで集まれないし、仕方ない」そう誰しもが当たり前のように口にし、考えることさえ放棄してしまったように見える今だからからこそ、私たちが自分たちの立つ場所のできることは何かと、もう一度問わずにはいられません。

残念ながら、まだしばらくは、コロナとのつきあいをゼロにすることは難しそうです。私たちの保育園でもきっと、明日からも、判断に迷い、すっきりとは答えが出ずに悩み葛藤することの連続が続くのだと予想されます。しかし、それでも、アトムでの保育や家庭支援は「世の中」や「コロナ」が押し付けてくる「正解」側からだけ考えるのではなく、どうしてもなく『はみだしてしまう』目の前の苦しいひとりの側がら見える「正解のない問い」に向き合うことから始めたい、そう改めて思っています。